Osaka University Knowledge Archive

Title	小児の入院と母親の付き添いがきょうだいに及ぼす影響
Author(s)	新家, 一輝
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49966
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【３】

氏　　名	新家一輝（にいのみかずてる）
博士の専攻分野の名称	博　士（看護学）
学　位　記　番　号	第　２２８１６　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 医学系研究科保健学専攻
学　位　論　文　名	**小児の入院と母親の付き添いがきょうだいに及ぼす影響**
論文審査委員	（主査） 教　授　藤原千惠子 （副査） 教　授　永井利三郎　　教　授　大橋　一友

論　文　内　容　の　要　旨

【緒　言】近年の核家族化,少子高齢化,離婚率の増加,共働き夫婦の一般化などに伴い,家族機能の変化や家族の危機対応能力の脆弱化が指摘されており,小児の入院に母親が付き添う場合,きょうだいおよび家族が受ける影響は大きくなっていることが予測される.欧米では,1960年代より徐々に,そしてわが国では家族看護への関心とともに1980年代後期より,きょうだいへの影響に注目が向けられ始めてきた.しかし,先行研究は実態を調査する段階のものが殆どであり,きょうだいの情緒と行動の問題の程度に注目したものや,そこに関連する要因について分析したものは少ない.また一方できょうだいは,小児の入院と母親の付き添いという家族にとっての逆境の中においても,入院する小児や家族のためにがんばり努力し肯定的な変化を見せている.この肯定的な変化への注目が,きょうだいの自己効力感を高めたり,不安や家族からの隔離感の出現などの否定的な変化の緩和に繋がる可能性がある.しかし、このきょうだいに起こる肯定的な変化全体の内容はこれまで明らかにされていない.また,きょうだいの否定的な変化と肯定的な変化の両面に注目した研究も少ない.

■研究1：きょうだいの情緒と行動の問題の程度と属性背景因子との関連性

【目　的】小児の入院と母親の付き添いによるきょうだいに生じた情緒と行動の問題の程度を,母親の認識を通して把握し、属性・背景因子との関連性を分析する.

【方　法】対象:全国の病床数400以上で,小児科を有する病院の中から無作為に抽出した438病院のうち,協力を得た86病院において,小児の入院に付き添っている母親301名を分析対象とした(回収率44.3%).方法と期間：郵送による自記式無記名質問紙調査.調査期間は2005年3月中旬～2006年9月30日.調査内容:属性・背景因子は,先行研究を参考に,きょうだいの情緒と行動の問題の程度への関連が予想される,きょうだいの年齢,主な居住場所,世話人,入院児の入院期間などの25項目を調査した.情緒と行動の問題の程度の把握には,市販のCBCL/4-18(Child Behavior Checklist)日本語版(以下,CBCL)の,ひきこもり尺度(9項目)・身体的問題訴え尺度(9項目)・不安/抑うつ尺度(14項目)の3症状群尺度の上位尺度である内向尺度を使用した.分析方法：CBCL得点は、既存の正常域・境界域・臨床域に区分するカットオフポイントを基準に分類した.次に,属性・背景

因子を独立変数に,CBCLの各尺度得点を従属変数に投入し,SPSS12.0Jを用いて重回帰分析(ステップワイズ法)を行った.**倫理的配慮**：本調査は,当大学医学部保健学倫理委員会の承認後に開始した.

【結　果】きょうだいは4.4±3.7(*M*±*SD*)歳,入院児の入院期間30.5±59.0,0-341,7.0(*M*±*SD*,*Range*,*Mdn*)日.きょうだいの情緒と行動の問題の程度について,下位3症状群尺度いずれの場合も,得点が臨床域に達した者がおり｛ひきこもり尺度22名(7.3%);身体的問題訴え尺度16名(5.3%);不安/抑うつ尺度37名(12.3%)｝,上位尺度の内向尺度の得点が臨床域に達した者は88名（27.5%）で,境界域に達した者を含めると全体の39. 5%を占めた.属性・背景因子のうち質的データは1-0データに変化し,多重共線性の問題の発生を回避するために｜r_s｜≧.7と相関が高い3項目を除外した後に,重回帰分析を行った.いずれの場合も*VIF*<2であった.内向尺度へは,$R(R^2)$=.35(.12)の範囲で,母親の状態不安の程度が高い程,きょうだいの面会が不可能な場合,入院児の入院回数が多い程,主な世話人が別居人の場合,問題の程度が強くなるという関連性が示された.下位3症状群尺度それぞれにも関連する属性・背景因子が示され,上記の他に,きょうだいの年齢が高い程,入院児の年齢が低い程,入院児の出生順位が下位程,きょうだいへの病状説明がなされている場合に,きょうだいの問題の程度が強くなる可能性が示された.

■研究2：きょうだいの肯定的な変化の内容

【目　的】小児の入院と母親の付き添いによるきょうだいの肯定的な変化について,母親の認識を通して調査し,その内容を明らかにする.

【方　法】**対象**:研究1と同様の方法で抽出した300病院のうち協力を得た62病院において,小児の入院に付き添っている母親201名を分析対象とした(回収率44.5%).**方法と期間**：郵送による自由回答形式の質問紙調査.調査期間は2006年7月中旬～9月30日.**調査内容**:基本的な属性・背景因子と,入院・付き添い開始以降にみられたきょうだいの肯定的な変化を調査した.**分析方法**:質的帰納的デザインとし,内容分析(Krippendorff, 2004)の手法を用いた.信頼性の確保をするため,小児看護の臨床経験3年以上で看護学系大学院在籍2名に分析を依頼し,研究者と院生2名それぞれの2者間での単純一致率と,3者間でのKrippendorff'αを算出した.**倫理的配慮**：研究1に同じ.

【結　果】きょうだいの年齢6.5±3.7(*M*±*SD*)歳,入院児の入院期間26.6±56.3,1-341,6.0(*M*±*SD*,*Range*,*Mdn*)であった.きょうだいの前向きな変化についての記述201件から抽出された368記録単位は93コードに分類され,その顕在的内容から26サブカテゴリーに類型化され,その潜在的内容から最終的に5テーマが形成された.単純一致率87.3%と86.3%,Krippendorrf'sα=.84で,本研究内容分析の結果の信頼性が確保された.以上より、きょうだいの肯定的な変化の内容は,5テーマ【現状の把握】【情動の変化・成長】【肯定的な行動の変化・増進】【情動のコントロール・抑制の増進】【自立的行動の増進】より形成されていることが明らかとなった.

【総　合　考　察】小児の入院と母親の付き添いにより生じるきょうだいの否定的な変化については,本研究で得た属性・背景因子の関連性への示唆が,支援者がフォローすべききょうだいの優先順位の決定など,実際のきょうだいへの支援に役立つと考えられる.また,きょうだいに対する入院児の病状についての説明や面会制度のあり方の見直しを図る一つの指標になることも考えられる。肯定的な変化については,実際にきょうだいがしている肯定的な変化に目を向ける際に,本研究で明らかになった変化の全体的な内容を参考にすることでより迅速に変化を知ることができると考えられる.支援者は,きょうだいがしているがんばりを認めねぎらって行き,きょうだいの自己効力感を高めたり,否定的な変化の緩和に繋げていくことができると考えられる.さらに,否定的な変化と肯定的な変化の両面は,例えば肯定的な変化を多くしているきょうだいには否定的な変化があまり出現していない,といった単純な双極の関係にあるのではなく,寂しい気持ちや不安といった否定的な感情を抱きながらも,入院児や家族のためにがんばろうとしているきょうだいがいるように,相互に影響を与え合い複雑な関係性を持ちながら出現していることが考えられる。

論文審査の結果の要旨

近年になって、病気や障害を持ち入院する小児のきょうだいへの影響に、研究分野からも注目が向けられ始めてきた。しかし、先行研究は実態を調査する段階のものが殆どであり、きょうだいの情緒と行動の問題の程度に注目したものや、そこに関連する要因について分析したものは少ない。また、一方できょうだいは、小児の入院と母親の付き添いという家族にとっての逆境の中においても、入院する小児や家族のためにがんばり努力し肯定的な変化を見せている。この肯定的な変化への注目が、きょうだいの自己効力感を高めたり、不安や家族からの隔離感の出現などの否定的な変化の緩和に繋がる可能性がある。しかし、このきょうだいに起こる肯定的な変化全体の内容はこれまで明らかにされていない。また、きょうだいの否定的な変化と肯定的な変化の両側面に注目した研究も少ない。

研究1では、小児の入院と母親の付き添いによるきょうだいに生じた情緒と行動の問題の程度を、母親の認識を通して把握し、属性・背景因子との関連性を分析することを目的にしている。方法は質問紙調査で、全国の病床数400床以上で小児科を有する病院の中から無作為に抽出し、協力を得た86の病院において、小児の入院に付き添っている母親301名からの回答を、統計学的手法を用いて分析した。分析の結果、きょうだいには、情緒と行動の問題が強く出現する傾向があり、その中でもひきこもりの傾向や身体的な問題を訴える傾向、不安を強く抱き抑うつの傾向を出現させる者がいることが明らかになった。また、きょうだいの情緒と行動の問題の程度には、母親の状態不安の程度や、きょうだいに対する面会制限、入院児の入院回数、きょうだいの主な世話人、きょうだいの年齢、入院児の年齢と出生順位、きょうだいの入院児の病状に関する説明の程度が関連を示していることを明らかにした。

研究2では、小児の入院と母親の付き添いによるきょうだいの肯定的な変化について、母親の認識を通して調査し、その内容を明らかにすることを目的にしている。方法は質問紙調査で、全国の病床数400床以上で小児科を有する病院の中から無作為に抽出し、協力を得た62の病院において、小児の入院に付き添っている母親201名からの回答を、Krippendorffの内容分析の手法を用いて分析した。分析の結果、母親の認識を通した、小児の入院と母親の付き添いによるきょうだいの肯定的な変化の内容は、【現状の把握】、【情動の変化・成長】、【肯定的な行動の変化・増進】、【情動のコントロール・抑制の増進】、【自立的行動の増進】の5つのテーマから形成されているいることを明らかにした。

以上の結果より、この研究論文は博士(看護学)の授与に値する。